

# 控物捕次平形錢

吉七廿第

堂胡村野

庫文空青



「親分、變なことがありますよ」

八五郎のガラツ八が、長んがい顔を糸瓜棚へちまだなの下から覗かせた時、錢形の平次は縁側の柱にもたれて、粉煙草をせゝり乍ら、赤蜻蛉かとんぼの行方を眺めて居りました。この上もなくのんびりした秋のある日の夕刻です。

「びつくりさせるぢやないか、俺は糸瓜が物を言つたのかと思つたよ」

「冗談でせう。糸瓜が鬚まげを結つて、意氣な裕あはせを着るものですか」

ガラツ八はその所謂いはゆる意氣な袴の衣紋えもんを直して、ちよいと結び立ての鬚節に觸つて見るのでした。

「だから、變なんだよ。糸瓜が鬚を結つたり、意氣な袴を着たり

——」  
「まぜつ返しちやいけません」

平次とガラツ八は、相變らずこんな調子で話を運ぶのでした。

「ぢや、何が變なんだ、其處で申上げな」

「その前に煙草を一服」

「世話の焼ける野郎だ」

平次は煙草盆を押しやります。

「恐ろしい粉だ。ほこり埃ほこりだか煙草だか、嗅かいで見なきや解らない」

「贅澤を言ふな」

「相變らずです、ね、親分」

ガラツ八は妙にしんみりしました。江戸開府以來と言はれた名御用聞の錢形平次が、その清せいれん廉れんの故に、何時まで經つてもこの貧乏から抜け切れないのが、平次信仰で一パイになつて居るガラツ八には、不思議で腹立たしくてたまらなかつたのです。

「大きなお世話だ。粉煙草は俺が物好きで呑むんだよ。——それよりもその變な話といふのは何んだ」

「根岸の御ごいんでん隱いん殿でん裏うらの市太郎殺しの後日物語があるんで——」

「下手人でも判つたのか」

「あればかりは三輪の親分が一と月越し血眼で捜してゐるが判り

「ませんよ」

「ぢや、何が變なんだ」

「親分に言はれて、此間から氣をつけてみると、あの家の下女——お菊といふ十八九の可愛らしい娘が、毎日淺草の觀くわんのん音様へお詣りをするぢやありませんか」

「信心に不思議はあるまい。日參をして岡つ引に睨まれた日にや、江戸に怪しくない人間は幾人もゐないことになるぜ」

「それが變なんで」

「娘が綺麗過ぎるんだらう」

「その綺麗過ぎる娘が、觀音様にお詣りをするだけなら構はないが、必ず御神籤おみくじを引くのはどうしたわけでせう」

「毎日か」

「一日も缺かかしません。その上、引いたお神籤を八つに疊んで、

仁王門外の桑くめの平へい内ない様の格子に結はへる」

「毎日同じことをやるのか」

「あつしがつけてから十日の間、一日も缺かしませんよ。降つても照つても」

「時刻は？」

「巳よつ刻つ(十時)から午こ刻のつ(十二時)の間で」

「待ちな、元三大師の御籤おみくじには忌日きにちがあるものだ。日も時も構はず、毎日御神籤を引くのは、いくら小娘でも變ぢやないか、八」

「だからあつしが變だと言つたぢやありませんか——糸瓜へちまに鬚まげを

結はせたり、意氣な衿あはせを着せたのは親分の方で——」

「そんなことはどうでも宜い。——その娘は誰かと逢引をする様子は無いのか」

「根岸から眞つ直ぐに來て、眞つ直ぐに歸りますよ。尤もつとも、時々變な野郎が娘の後をつけて居る様子ですがね、振り向いても見ませんよ」

「變な野郎？」

「若くて一寸濫しぶかは皮のむけた娘の後をつけるんだから、どうせまともな人間ぢやありません」

「お前もそのまともでない人間の一人だらう」

「へッ」

「ところでその娘は、引いたお神籤を丁寧ていねいに讀むのか」

平次の問ひは妙なところへ立ち入ります。

「丁寧にもぞんざいにも、見ようともしませんよ」

「ブーム」

「そのまゝ、八つに疊たむんで帶の間へ挟んで、御神籤所から段々を降りて石いし疊たたみを踏ふんで、仁王門にわうもんを出て、糸の平内様のお堂の前へ立つて、帶の間から先刻の御神籤を出して格子に結はへるんで」

「その手順に間違ひは無いだらうな」

「毎日同じことをやるんだから間違ひつこはありません。餘程念入りな願をかけるんでせうね」

「面白いな八、明日は俺が行つて、娘の所作しよさを見極めよう。そい

つは何んか理由がありさうだ」

「へエー、親分が乗出すんですか。——三輪みのわの親分が氣を揉もんで、

見境みさかひもなく人を縛りますぜ」

「そんなこともあるまい」

平次は相變らず赤蜻蛉あかとんぼの亂れ飛ぶのを眺め乍ら、鐵拐仙てつかいせん

人のやうに粉煙草の煙を不精らしくふか燻ふかすのでした。女房のお靜

は、貧しい夕食の仕度に忙しく、乾物ひものを焼く臭ひが軒に籠ります。

二

根岸は隱殿裏の武家出らしい母娘の家へ曲くせもの者が忍び込んで、

用人あがりの中老年人、市太郎といふのを斬つて逃げうせたのは、もう一ヶ月も前のことでした。

母親の女主人は浪乃なみのと言つて、三五六の少し陰氣ではあるが立派な婦人。娘は十二三で、殺された市太郎老人は五十を越したばかり、そして美しい下女——といふよりは、お腰元らしいお菊といふのは、十八か九で、こればかりは五月の陽のやうな明るく美しい娘でした。

引越して來たのは去年の暮、ひつそりとした暮しやうで、西國の武家出とばかり、氏うぢも素姓もわかりませんが、近所の評判もよく、店舗みせも確かで、何んの仔細しさいもなく過してゐるうち、今から一度一ヶ月前、ある夜曲者が忍び込んで、入口の六疊に休んでゐる

市太郎老人を斬り殺し、奥へ踏込むところを折よく外から歸つて來たお菊の聲に驚いて、何んにも盜む隙もなく、そのまゝ逃げてしまつたといふのです。

檢屍も滞りなくすみましたが、下手人は何んとしても擧がり

ません。その時家の中に居たのは、殺された市太郎の外には、女

主人の浪乃と、小さい娘の早苗さなえと二人きり。娘は風邪かぜの氣味で早

寢をして何んにも知らず、奥に居た浪乃は怪しい物音に飛んで出

ると、市太郎を殺した曲者は、裏口から入つて來たお菊の聲に驚

いて取るものも取らずに逃げうせたのでした。市太郎の傷は前か

ら頸筋を突かれた一と太刀で、お菊が歸つたときはまだ虫の息が

あり、だんまつま斷末魔乍ら、主人の浪乃を伏し拜むやうにしてゐたとい

ふことだけは解つて居ります。

表の格子戸は内から亂暴らんぼうに外され、六疊一パイの血の海です。土地の御用聞三輪の萬七は、時を移さず乗込みましたが、まるつ切り下手人の見當もつかず、そのまゝ愚圖々々と一ヶ月といふ日が経ちました。その間係り同心の勤めで、錢形の平次は呼出されましたが、一應現場を見ただけ、三輪の萬七に義理を立てたか、あまり口を出さずに歸つてしまひ、その後は三輪の萬七にも内ないし證よで、子分の八五郎に、そつと見張らせて、情勢の變化を眺めて居たのでした。

その八五郎が、美しい下女のお菊の動靜を見張つてゐるうち、淺草の日參と、お神籤みくじと、桑くめの平へい内ない様の格子の謎なぞを見付けたの

です。

「親分、出かけませうか」

翌る日の朝、まだ飯も済まぬうちに飛んで來たのは、勢ひ込んだ八五郎でした。

「大層早いぢやないか」

「でも根岸から観音様に廻ると、晝近くなりますよ」

「そいつは正直過ぎるだらう、お神籤所を見張つただけで澤山だよ」

だが、このガラツ八の馬鹿正直さが、平次のために、いろいろのことを發見してくれるのでした。

観音様にたどり着いたのは丁度巳刻よつ（十時）頃、二人は繪馬ゑまを

眺めたり、鳩はとに餌をやつたり、ざつと半刻ばかり待つて居ると――

「親分、來ましたよ」

ガラツ八はそつと平次の袖を引きました。

見ると丁度仁王門を入つて來るのは、平次にも見覚えのあるお菊といふ可愛らしい下女。鳩にも五重の塔にも眼をくれず、眞つ直ぐに段を登つて、大賽だいさい錢箱せんばこの前に立つと、赤い紙入を出して、小錢を摘つまんでポイと投げ、鈴の緒をに心持觸れて、双掌もちてを合せたまゝ、ひた拜みに拜み入るのでした。

「ちよいと、可愛らしいでせう」

「黙つて居ろ」

鼻筋の通つた、ふくよかな横顔をガラツ八は指します。

「親分」

「何んだ、うるさいな」

「あれがまともでない人間で——」

振り返ると段の中程のところ立つて、不精らしく懷手をしたまゝ、凝つと娘の様子を見て居るのは、渡り中間らしい様子をした中年男です。

「成程」

「あ、娘はお神籤みくじを引いて居ますよ」

「しッ」

下女のお菊はお神籤を引くと、別段それを見るでもなく、八つ

に疊んで、もう一つ中程から折つて帶の間へすべり込ませました。

其處から御堂を出て、石疊を渡つて仁王門を出るまで、娘の取濟ました顔は、一度も四方あたりを見ません。段の中途からそれを見詰めて居た人相のよからぬ男も、平へいぼん凡な日程を繰り返すやうな静かさで、何處ともなく姿を消してしまひました。いや、どうかしたら、物蔭からそつと眼を光らして居るかもわかりませんが、境内にはざつと見渡したところ、怪しい人影も無かつたのです。

お菊は糸の平内様の堂の前に立つと、これも事務的な冷靜さで、帶の間から先刻のお神籤を取出し、堂の格子へ器用な手付でざつと結びました。

「四方あたりを見ようともしない。——恐ろしいきも膽の据すわつた娘ぢやない

か」

錢形平次がさう言つた時、お菊はもう平内様の堂を離れて、傳でんぼふらん法院の横の方へ、美しい鳥のやうに姿を隠すのでした。

その時何處からともなく現はれた先刻さつきの怪しい男、お菊の跡を見え隠れにつけて行く様子ですが、お菊はそれを知つて居るのか知らないのか、相變らず振り向いて見ようともしません。江戸の賑ひを集め盡したやうな淺草の雜ざつたふ沓は、この意味もなく見える些さやかな事件を押し包んで、活きた坩堝るつぽのやうに、刻々新しい沸たぎりを巻き返すのです。

「此處まで見て、お前は引揚げたんだらう」

平次はガラツ八の茫ぼつとした顔を顧かへりみました。

「あの娘をつけて見ましたが、御隠殿裏へ眞つ直ぐに歸るだけで、何んの變へんてつ哲もありませんよ。江戸の眞ん中ぢや、眞晝の天道様に照らされて、どんな送り狼おほかみだつて、業わざは出来ません」

ガラツ八は長いあごを撫でるのです。

「何を言ふんだ、娘のことぢや無い。あれだよ」

「へエ——」

平次は糸の平内様のお堂を指し乍ら續けました。

「あの格子に、澤山お神籤みくじが結んであるだらう。縁えんむす結びのまじ

なひにされてゐるんだ。古いの新しいの、勘定し切れないほどあるが、たつた一つ變つたのがある筈だ」

「？」

「端つこをちよいと紅で染めたお神籤だよ——天地紅のお神籤なんか何處のお寺へ行つたつて出るものぢやない」

「へエ——」

「あの娘は觀音様の本堂から此處まで來る間に、お神籤の端はしを染める暇が無かつた筈だ」

「？」

「だが、あのお神籤は前には無かつたことは確たしかだ。矢張りあの娘が結はへたんだ。——間違ひはない。今引いたお神籤を、讀み

もせず、平内様の格子に結ぶ筈はないから、矢張り帯の間に細工さいくがあつたに違ひあるまい。あの赤いお神籤は、家から用意して來たんだらう」

「へエ——。手數のかゝる細工ですね」

「それどころぢやない、娘は赤いお神籤みくじを結ぶ時、前にあの格子かうしに結んであつた、青い印しるしのあるお神籤を解いて持つて行つたよ。

——それに氣が付かなかつたのか」

「本當ですか、親分」

ガラツ八は見事に十日間娘に馬鹿にされて居たのです。

「赤い印や青い印の付いたお神籤は、何百何千の中でも一と眼に解るよ。俺は先刻此處へ來たとき、確かに見定めて置いたから間

違ひは無い」

「へエ——」

「驚いてばかり居ずに、あの赤いお神籤を解といて來るが宜い。青いを見なかつたのは手ぬかりだが、なあに、赤いのみをみただけでも、大方の當りはつくだらう」

さう言ふうちにもガラツ八は、平内様の堂の格子から——お菊が結び捨てて行つた、赤い印のあるお神籤を解いて來ました。

「こいつは樂ぢやありませんね、親分。皆んながジロジロ顔を見るんだ」

「心配するなよ、泥棒と間違へられつこは無い。——男のくせに縁えんむす結びのまじなひなどをするのは、どんな野郎だらうと思はれ

るだけのことさ」

「尚ほな悪いや」

「おやく、矢張りお神籤みくじだ——多分昨日引いたのへ書き込んで今日持つて来たんだらう。『第廿七吉、祿を望んで重山なるべし、花紅なり喜悅の顔、か。——病人は本服すべし、待人來るべし——』そんな事はどうでも宜いとして、見事な筆跡てで書き入れがしてあるよ。『當方無事、あと三日の間、命にかへて頼み入る』と」

「それは何んの事でせう、親分」

「判らないよ」

「驚いたなア、親分が判らなかつた日にや、天道様にだつて判るわけはねエ」

「馬鹿なことを言へ。——ところで、もう赤いお神籤を取りに来る刻こくげん限だらう。これを元の通り格子へ結んで置いてくれ」

「へエ」

「いやな顔をするな。——精一杯縁結びに取憑とりつかれて居るやうな顔をするんだ」

「驚いたなア」

ブウブウ言ひ乍らも、八五郎は赤いお神籤を、元の格子に戻しました。

それからほんの煙草を二三服した頃、

「それ見るが宜い。お前見たいな、縁結びに取憑かれてゐる野郎が來たぢやないか」

平次が指した糸の平内様の格子の前に、威勢の良い男がフラリと立ちました。まだ若さうな着流し、彌造が板について、頬冠ほつかぶりは少し鬱陶うつたうしさうですが、素知らぬ顔で格子から赤いお神籤を解く手は、恐ろしく器用です。

「捕まへませうか、親分」

「馬鹿、お神籤泥棒ぢや引立てばえもあるまい。——黙つて後をつけるんだ。落着く先を見極めさへすれば、わけもなく眼鼻がつくよ」

「それぢや親分」

「抜ぬかるな、八」

「なアに、二本差でなきや、多寡たくわが知れてゐますよ」

八五郎はヒラリと身をひるが翻へすと、怪しの男が平内様の堂を離れるのと一緒でした。二人は仲見世の人混みの中を縫つて、雷門の方へ泳いで行くのを、平次は何にかおぼつか覺束ない心持で見送つて居ります。

#### 四

その晩、平次の家へ戻つて來たガラツ八の八五郎は、申分なく散々の態でした。

「あ、驚いた。親分の前だが、あつしはまだ、あんな野郎に出つくはしたことはありませんよ」

自慢の鬚まげぶし節は横町の方に向いて埃ほこりをかぶり、意氣な衿はしま目も判らぬほど泥に塗れて、全身いたるところに傷だらけ、それがお勝手口からコソコソとでも入ることか、町内に響き渡るやうな聲を張上げて、平次の所謂いはゆる大玄關に、立ちはだかるのです。

「何んといふ恰好だい、裏へ廻つて泥だけでも落すが宜い——お静、俺の衿あはせを出してやれ、一番野暮やぼなのが宜いよ、身につかないものを着るとろくなことは無いから」

小言をいひ乍らも、兎も角も男振りだけでも直して、長火鉢の前に据すゑました。幸ひ傷は摺すり剥むきと引つ搔すきだけ、生命に別條のあるのは一つありません。

「驚いたの驚かないのつて、こんな眼に逢ふと知つたら、親分も

一緒に行つて貰ふんでしたよ」

ガラツ八の仕方話は始まりました。

赤いお神籤みくじを取つた怪しの男をつけて行くと、駒形からお藏前を、兩國へ出て、本所へ渡つて、深川へ廻つて、永代を渡つて築地へ抜けて、日本橋から神田へ、九段を登つて、牛込へ出て、本郷から湯島へ來ると、日はトツプリ暮れたといふのです。

「腹ごしらへはどうした」

平次は訊きました。

「吞まず食はずですよ。鹽煮餅しほにもちを買ふ隙ひまもありやしません。恐

ろしく足の達者な野郎で、うっかりすると姿を見失ひます。でも半日歩き續けて、上野へ來たときは二人ともヘトヘト、歩いてる

んだか、這つてるんだか解りやしません」

「馬鹿だなア」

それが平次の深しんじん甚な同情の言葉でした。

「谷中へ入つた時、あんまり癩しやくにさはるから到頭武者ぶり付きましたよ。此儘續けた日にや、夜の明ける前に參つて仕舞ふ。何なに糞そで、いきなり御用ツと來ましたね。——威勢よくやつたつも

りだが、口惜しいことに聲が出ねえ。半日吞まず食はずぢや、ろくな睡つばだつて出やしませんよ」

「それから何うした」

「二つ三つねち合つたと思ふと、——口惜くやしいが此通り、手もなぐやられましたよ。藪やぶの中へ投げ込んで、『あばよ』だつてやが

る。親分の前だが、口惜しいの何んのか——」

ガラツ八は手放しのまゝ、ポロポロと涙をこぼすのです。

「馬鹿野郎ツ」

平次の聲はりんとしました。

「——」

「何んだって夜つびて後を跟つけなかつたんだ」

「へエー」

「へエ、ぢや無いよ。噛かじり付いたら、雷かみなり鳴が鳴つても離さない

のが岡つ引のたしなみだ。見ればガン首も手足も無事ぢやないか」

「へエ」

「それとも何んか動きのとれない證據でも押へて來たのか」

「お生憎様で」

「お生憎様でえ奴があるか、馬鹿だなア」

平次も到頭吹き出してしまひました。

「もう一度行きますよ、親分。明日は姿を變へて平内様のお堂の前に頑張ぐわんばつて、三日分ばかり兵糧ひやうらうを背負つてつけたらどんなもので——」

「勝手にするが宜い」

ガラツ八は頭を抱へて飛出しました。その晩のうちに、大阪へ行くほどの仕度を整へ、翌る日早々淺草へ乗込んだことは言ふまでもありません。

五

その翌る日、ガラツ八は見事に使命を果しました。

「親分、大變ツ」

大變の旋風せんぷうが飛込んだのは、戌刻半いっくはん（九時）少し廻つた頃。

「さア來たぞ。今晚あたりはその大變が降りさうな空模様だと思つたよ」

平次はそれを期待して居たのでせう。

「昨日と異つて敵ちがに覺さとられずに見事に後をつけましたぜ。相手が淺草から眞つ直ぐに巢へ行つたんだから間違ひは無いでせう」

「その巢は何處だ」

「本所相あひおひ生町の裏長屋で」

「それから」

「一日頑ぐわんぱ張つたが、それつ切り出て來ませんよ。あの風體だから、見落す筈は無いんだが——」

「お前と同じことだ、姿を變へて出たんだらう」

「あつしもそれに氣が付いて、いきなり飛込みましたよ。すると、大時代の婆アが一人、念佛を稱となへ乍ら商賣物の姫糊ひめのりを拵へてゐるぢやありませんか」

「それから何うした」

「散々脅おどかした末、たうとう口を割りましたよ。あの曲者といふのは親分、驚いちやいけませんよ」

「誰が驚くものか。——二千五百石の大旗本、駒形にお屋敷を持つて今長崎奉行をしていらつしやる、久野將しやうげん 監様の家來、先頃殺された用人進藤市太郎の伴勝之助といふ男だらう」

「どうしてそれを親分」

ガラツ八の驚きやうは見事でした。

「お前が三十里も歩く間、俺はヂツとして居る筈は無いぢやないか。あのお菊といふ娘を脅おどかしたり、すかしたりこれだけのことを言はせるのに二日かゝつたよ」

「人が悪いなア、親分」

ガラツ八は少しばかり不服さうです。

「まあ怒るな八、何でも判りさへすればよかつたんだ。二人共判

つたんだから、怨みつこはあるまい」

「それつ切りですか、親分」

「まだいろ／＼のことが判つたよ。手つ取早く言ふと、主人の久野將監様がお役目で一年前から長崎へ出張、異人との掛け合ひに骨を折つて居るのに、駒形の留守宅では、叔父の深田琴吾といふのが、家來の山家斧三郎と腹を合せ、お妾のお新といふ女を立てて、奥方の浪乃様を、いろいろ難癖をつけて屋敷に居られないやうに仕向けた。お氣の毒なことに奥方の浪乃殿は、お里方が絶家して歸るところも無く良人將監殿が江戸へ歸るまでは、滅多に死ぬわけにも行かない。跡取の謙之進様——十歳になつたばかりのを屋敷に残し、十二歳のお嬢様早苗様といふのと、お腰元のお

菊、それに用人の市太郎をつれて、根岸の御隠殿裏の貸家に籠つた——不義ふぎの汚名をめいを被きせられ、親類一黨から義絶された奥方としては、斯かうするより外に工夫は無かつた」

平次の話は續きました。

根岸に籠つた奥方は蔭かげ乍ながら屋敷に残した伴謙之進の上を案じ、女の智恵に及ぶ限りの工夫をこらしてそれを守護しました。腰元のお菊と、用人進藤市太郎の伴で、屋敷に踏止まつた勝之助が、青と赤の印の付いたお神籤みくじを交換して、僅わづかにお互の無事を知らせ合ひ、いろ／＼しめし合せて來たのは、行届き過ぎる悪人共の監視の眼をくゞり、その毒計に對抗して、家と若君との無事を計る苦衷だつたのです。

主人將監は長崎のお役目が濟んで、いよ／＼三日の後には歸ることになりました。その三日さへ無事に過せば、奥方の無實を言ひ解く道も開け、若君謙之進の身も安泰あんたいになるでせう。が、惡人のあせりやうも一段猛烈を極めて、その三日を無事に暮せるかどうか、甚だ覺おぼつか束ない有様になつてゐることも事實でした。

「親分、さう聽いちや放つて置けません、乗込んで行きませう」  
「馬鹿なことを言へ、町方の岡つ引が、二千五百石のお旗本の屋敷へ乗込めるわけは無い」

平次の悲しみはそこだったので。いかに證據が山程揃つても、武家屋敷の堀へいの中までは、町方の手は届きません。

「口惜しいぢやありませんか、親分」

「だが、たつた一つ」

平次は深々と考へ込みました。

六

明日はいよく主人將監が歸るといふ日、錢形平次は到頭青いお神籤みくじの曲者——實は久野將監しやうげんの家來進藤勝之助を本所相あひお生町ひの隠れ家に突きとめてしまひました。最初は散々白ばつくれましたが、ぐんぐん突つ込んで行く平次の問ひに追ひ詰められて、

「それぢや、どうしろといふのだ。——拙者はいかにも進藤勝之

助、仔細しさいあつて姿を變へたところで、町方役人に文句を言はれる道理はあるまい」

意氣あはせな裕の前をキッチンと合せて進藤勝之助は四角に坐るのでした。二十二三のまだ若い苦味走つた良い男、腕にも分別にも申分のないのが、侍の地が出ると、さすがに犯をかし難いところがあります。

「進藤さん、さう打ち明けて下さると何より有難い——。あつしの申すことを聽いて下されば、あなたの親御——市太郎様を殺した相手も教へて上げませう」

「父親を討つたのは、誰だ。先づそれから聽かうぢやないか」

「いえ、それは一番後で申上げます。それより、親御様市太郎様

は、奥方様の御味方ですか、それともお部屋様方ですか、あなたは御存じでせうね」

「――」

勝之助の顔色はサツと變りました。

「私から申上げませうか。――父上市太郎様も最初は奥方様の御味方だったに相違ありません。が、フトしたことから悪人共に悪い尻しりを押へられ、後には次第々々にお部屋様方に味方するやうになり、亡くなる頃は、動きの取れない悪人方になつて居りました。――あなたがそれを、どんなに心苦しく思はれたかもよく解つて居ります」

「――」

勝之助はヂツと膝に眼を落しました。この一年間、悪人方に轉落して行く、心の弱い父の姿を見ることが、どんなに凄まじい苦痛だったでせう。

「ところが、亡なくなつた後に残る、父上市太郎様の汚名をめいは何となさいます」

「父の汚名？」

「悪人共ことごとは悉く細工さいいくをしてしまひました。明日江戸御歸府の殿様に御覽に入れるため、あなた様の父上市太郎様を奥方不義ふぎの相手に拵こぎへ御親類方にまで披露の手筈になつて居ります」

「それは本當か」

勝之助の顔はもう一度變りました。

「父上市太郎様の懺悔状ざんげじょうを作り、山家斧三郎がそれを持つて居ります。今夜は多分深田琴吾きんご、御部屋様などと顔を合せ、最後のてはず手筈を定めることで御座いませう」

「どうしてそれが解つた」

「お菊の言葉や、父上市太郎様の最期の様子、奥方のお言葉の端々からそれ位のことことは察しました。それに駒形のお屋敷には一昨夜から、三人の諜者てふじやを入れ、出入りの商人かんとしやは悉く調べ上げてしまひました」

平次の周到さは、たつた二日一夜の間に、早くも事件の全貌ぜんぼうを掴んでしまつたのでせう。

「――」

「あつしの申すことが本當か嘘か、今晚お屋敷の内の何處かに、三人の悪人が相談して居るところを突きとめ、その話の様子が少しでもわかれば、何も彼も分明になります。その上で、御隠殿裏の奥方様の御隠れ家にお出下されば、親御様の敵の名を申上げませう。——宜しう御座いますか、進藤様」

平次は念を押しました。この青年武士を用ふるより外に、悪人の企みたくらを知る工夫は無かつたのでせう。

「よし、確しかと引受けた、その代り」

勝之助は青白い顔を挙げます。屈くつじよく辱はと義憤に、ワナワナと頬が顫ふるへます。

「萬一私の申すことが嘘うそでしたら、平次の首を差上げませう——

と申しても張合の無いやうな私で御座います。斯うしませう。私  
の見込が外れたら、今晚限り十手捕縄を返上し、この鬻節を切つ  
てお詫びいたしませう」

「よし、確と言葉を番へたぞ」

勝之助はフラフラと立ち上がりました。

この後のことは、長々と書くと際さいげん限もありませんが、ざつと

筋だけを通すと、その晩進藤勝之助は、深田琴吾、山家斧三郎の  
二人の悪者を取つて押へて、御隠殿裏の奥方の隠れ家に飛込んで  
來たのでした。

「平次殿、——一言も無い。まさに察しの通り、悪人共は亡なき父  
一人に悪名を負はせ、明日は歸府の殿を欺あざむく企たくみであつた。あま

りの事にその席に飛込んで、かくの通り。残念乍らお部屋様は取り逃したが」

「到頭やりなすつたか、進藤様。——御心中御察し申します。併しかしこれより外に、御家安泰の道は無かつたでせう。見事父上の過失を償つぐなはれました」

平次は擧げかけた手を膝に置いて、奥方の方を振り返るのです。

「ところで、父の敵だ。約束通り、教へて貰はうか、平次殿」

勝之助の膝は、屹きつと平次の方を向きます。

「申しませう。——父上市太郎様の敵は、何を隠さう、父上御自身」

「何？ 何んと言ふ」

「父上市太郎様は、身を耻ぢはて自害じがいをなすつたのです。それを庇かばつたのは、此處に居られる奥方様と、お女中のお菊さん。萬一自害と知れては、父上様の非あはを發あくことになりませう。咄嗟とつさの間に  
お二人で相談して、刀を隠して格子戸を外し、曲者が外から入つて父上を害めたことに取とり繕つくろつたのです。それに間違ひはない  
でせうな」

「――」

奥方浪乃はうな垂れたまゝ涙を拭き、女中のお菊は眼をあげて、  
大ききうなづきました。

「よく判りました。親の敵を討たうとしたのは、この勝之助の淺墓かみさで御座いました。それでは、私は此儘退轉たいせんいたします。奥方

様には、今夜のうちに駒形のお屋敷にお歸り遊ばし、明日は晴れて殿様の御入府をお迎へ遊ばすやう」

勝之助は疊にもろて双手を落すのです。ハラハラと膝を洗ふのは、若さと純情さにあふ溢るゝ涙でした。

「有難う、勝之助、何も彼もお前のお蔭。——折があつたら歸つておくれ。——殿様へは、私からよく申します」

奥方は蒼白い顔を挙げました。激情に顫ふるへますが、限りなく上品な美しさです。

「では、奥方様」

「お待ち、これは、せめても私の志」

奥方は手文庫から、持もちおも重りのする金包を出して、ひた泣く勝

之助に押しやります。

後には貰ひ泣きのお菊と平次。——ガラツ八の八五郎も隣の部屋で大きく鼻を啜すつて居るのです。

×

×

×

翌る日は奥方浪乃、屋敷に歸つて良人久野將しやうげん監けんを迎へ、事件の顛末てんまつを、人を傷けない程度に報告しました。妾めかけのお新が、そのまゝ行方不知になつたことは言ふ迄ありません。

一件落着の後、ガラツ八の八五郎は、

「市太郎は本當に自害したんですか、親分」

割り切れない顔を平次にブチまけるのです。

「自害なものか、立派な下手人げしゆにんがあるのさ」

「へー」

「奥方だよ」

「へッ」

ガラツ八はさすがに膽きもをつぶします。

「用人の進藤市太郎は、最初悪人に引摺ひきずられたが、美しい奥方と一緒に居るうち、本當に悪い望みを起して、奥方に無禮なことをしたのさ——、末期まつごの苦しい息の下から、奥方の方を拜んだと聽いて俺は大方おほかたさつ察したよ。それにあの格子戸は外から曲者があけて入ったんぢやなくて、内から無理に外したのだ。多分お菊の細さい工いくだらう。刃物を隠したのもお菊かな。あの娘は恐ろしく伶俐だよ。——それに味噌摺みそすり用人でも何んでも武士たる者が、正面から

曲者に咽喉のどを刺されるといふ間拔な法があるものか。——誰も曲者の顔を見たものが無いといふのも考へるとをかしなことだよ。

——俺は最初からあの奥方が怪しいと思つて居たんだが、素性が判らないから手のつけやうは無かつたんだ。お前に見張らせたのはそれが知りたかつたからだよ。あわてて奥方を縛ると飛んだことになるぢやないか」

平次は斯かう説明するのです。お菊と勝之助との間は青と赤のお神籤を通して結ばれた。ほのかな親しみの始末については、いづれ勝之助が久野家に歸參の上、平次の橋渡しで何んとかなることとせう。





## 青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十七巻 権八の罪」同光社磯部書房  
1953（昭和28）年10月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1942（昭和17）年11月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2015年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 錢形平次捕物控

## 第廿七吉

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 野村胡堂  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>